

簡易な視野検査-対面・対座法



目的

手軽に簡便に行える視野の異常の検出

①手で行なう方法 参考) 安達恵美子編集:眼科診療プラクティス12 P6

準備物 検者の手

被検者と **50cm**程度離れて対座し、非検査眼を自分の手で確実に遮閉させ、検査眼と反対側の検者の眼(互いの対面眼)又は鼻を固視させる

大鹿哲郎編集:眼科学 P659



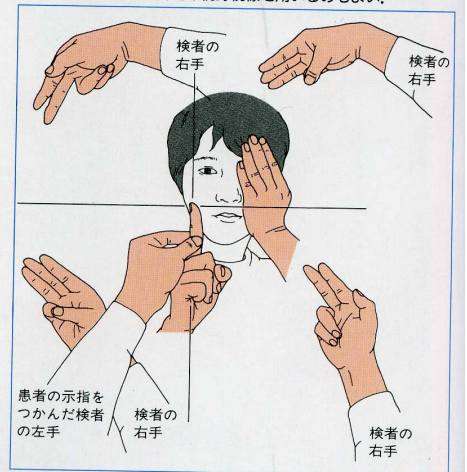
中心視野に障害のある患者の検査方法

本田孔士編集:眼科診療プラクティス 28 P238



参考

患者の指を揃えて眼前 30cm ほどにかざし固視標とする。患者に自分の指先が見えなくても、視線が比較的安定する。検者の他方の手(図では右手)は動視標とし、指をふらふら動かしてみせる。または指の数を答えさせることもある。動視標として普通の視野視標を用いるのもよい。



検者の手を**各4象限**に出し、見え方を聞く

- ・見えない所があるか?
- ・他の象限と比べ暗くなったり霞んだり色が変わって見える所があるか?

YES

視標の見え方が違うところでは視野異常が存在する可能性あり

NO

①**垂直経線**の**左右**、**水平経線**の**上下**(固視目標の位置が基準)で指の数を変えて交互に出し、見え方を聞く

- ・指の数が判らない象限があるか?
- ・他の象限と比べ暗くなったり霞んだり色が変わっている見える象限があるか?

YES

②両手の指の数を**2象限**に同時に出し、見え方を聞く

- ・指の数が何本か判らない方の象限があるか?
- ・他の象限と比べ暗くなったり霞んだり色が変わって見える象限があるか?

NO

半盲が存在する可能性あり
(半盲性欠損・半盲性沈下)

中心に置いた検者の指を固視させ、その周辺に指を出し見え方を聞く

- ・中心に置いた指の数が判らないか?
- ・周辺の指と比べ暗くなったり霞んだり色が変わって見えるか?

YES

全てNO

視野異常の疑いは少ない

中心暗点が存在する可能性あり

②簡単な視標で行なう方法 I 参考)本田孔士編集:眼科診療プラクティス28 P238、239 他

準備物 キャップ付瓶2つ(なるべくなら赤キャップ)又はマリオット盲点より小さい(10mm 以下)赤い視標のついた棒

被検者と 50cm 程度離れて対座し、非検査眼を自分の手で確実に遮閉させ、検査眼と反対側の検者の眼(互いの対面眼)又は鼻を固視させる



赤キャップの点眼瓶が結構いいらしい。

被検者が視認できる視標を各4象限に出し、見え方を聞く

- ・見えない所があるか?
- ・他の象限と比べ暗くなったり霞んだり色が変わって見える所があるか?

YES

NO

視標の見え方が違うところでは視野異常が存在する可能性あり

①視標を垂直経線の左右、水平経線の上下(固視目標の位置が基準)で交互に出したり、2象限に同じ視標を同時に出し見え方の違いを聞く

- ・見えない象限があるか?
- ・他の象限と比べ暗くなったり、霞んだり、色が変わって見える象限があるか?

YES

②視標を垂直経線を越えて左右、水平経線の上下(固視目標の位置が基準)に動かし同様に見え方を聞く

- ・見えない所があるか?
- ・他の象限と比べ暗くなったり、霞んだり、色が変わって見える象限があるか?

NO

半盲が存在する可能性あり
(半盲性欠損・半盲性沈下)

中心に置いた視標を固視させ、その周辺に置いた視標との見え方を聞く。

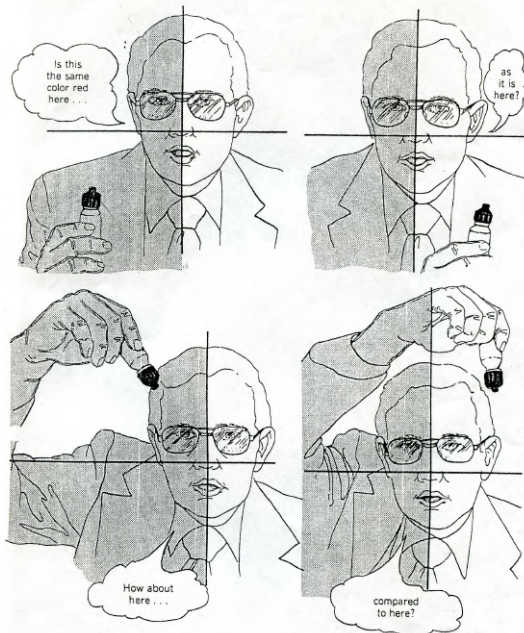
- ・中心に置いた視標が判らないか?
- ・周辺の視標と比べ暗くなったり霞んだり色が変わって見えるか?

YES

全てNO

視野異常の疑いは少ない

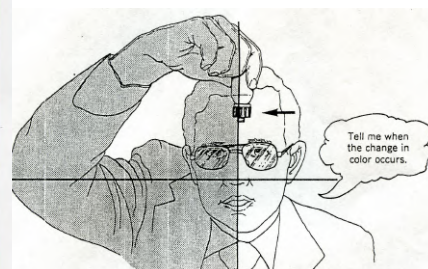
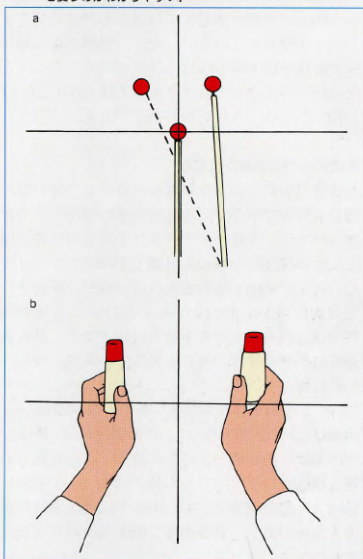
中心暗点が存在する可能性あり



2つの視標による4象限の検査

本田孔士編集:眼科診療プラクティス 28 P238

〔図3〕正中線を境にした左右視野の比較(半盲のスクリーニング)
正中線、水平子午線による十字を境にして、右上、右下、左上、左下の4象限の比較。色は(理論は抜きにして)赤を使うのがわかりやすい。



③簡単な視標で行なう方法Ⅱ 参考)若倉雅登編集:神経眼科外来 P65

準備物 特になし

検者の指で視野異常を見つける方法

被検者と対座し、被検者には非検査眼を自分の手で確実に遮閉させ、被検者の前方 30~40cm に検者の人さし指を置きその指先か、又は検者の鼻を固視させる

検者の反対の手を水平、上下、斜め方向に周辺から求心方向(被検者の固視方向)に向かって動かし、被検者が検者の手の平又は指先などの視標を認めたら答えさせる

4象限内をX字形に動かし、視標が見えない箇所がないか調べる

視野の広さと見えない箇所の有無の確認

検者の正常視野との比較で視野異常を見つける方法

被検者と同様に被検者には非検査眼を自分の手で確実に遮閉させ、検者も同様に被検者と反対の眼(互いの対面眼)を遮閉し、互いの眼を固視するようにする

眼を動かさないように指示し、検者と被検者の間の等間隔になる平面上(図の①)を、指先などの視標を移動させ視標が見えたら、又は見えなくなったら答えさせる

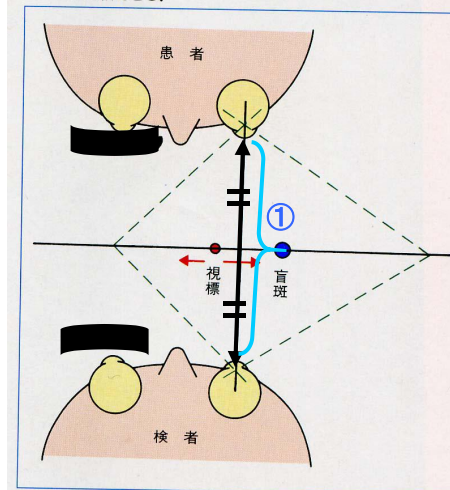


下方と耳側は広い為、重ね合わせが困難だが、鼻側と上方ではかなり詳しい情報が得られるよ。
だから緑内障の視野異常(鼻側階段)、半盲の検出に有用。

被検者が検者より狭い位置で見えた場合、正常より視野が狭い

本田孔士編集:プラクティス 28 「視野のすべて」P238、239

[図1] 検者の眼を見させて行う検査
動く視標としては盲斑より小さい10mm以下の大きさのものがよい(検者の示指でもよい)。
検者が左眼をつむり、視標を動かすと、検者と患者の視野が比較できる。



④簡単な視標で行なう方法Ⅲ 参考)松元俊・森本誠子:目で見える視野検査の進め方

準備物 削った赤鉛筆

中心暗点を赤鉛筆で見つける方法

検者は赤鉛筆を持って被検者と対座し、被検者には非検査眼を自分の手で確実に遮閉させる

検者は被検者の眼の高さで赤鉛筆を手の中に隠し持ち、被検者に赤鉛筆の先が見えたら合図するように言う

検者は指の間から芯を少しずつ出し、被検者が見えたところで止め、芯の色を尋ねる

赤色と答える

黒色(その他)と答える

正解

沈下あり



必ずしも暗点がないとは言えない。

